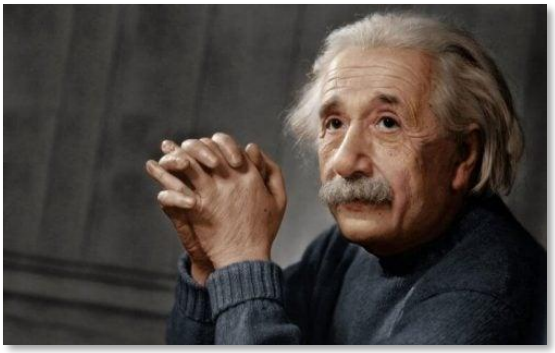
真野小だより

児童数：４６９名
Ｎｏ．１９
令和４年１月２１日発行

学校教育目標『あかるく　やさしく　たくましく』

常識とは、18歳までに身につけた偏見のコレクションである

教職員をはじめ、保護者や地域の方、様々な方と話をする機会がありますが、考え方もみんな違いますから、自分にとっての「常識」は、必ずしも相手にとっての常識とは限らないと意識して接するように努めています。ウィキペディアでは、「常識は、社会を構成する上で当たり前のものになっている、社会的価値観や知識、判断力のこと。また、客観的に見て当たり前と思われる行為、その他物事のこと。社会に適した常識を欠いている場合、社会生活上に支障をきたすことも多い。」とあります。古いタイプの私は先生を目指す方に、「面接の際のワイシャツは無地の白、靴下は黒。会場の入り口ではコートは脱ぎ、リュックを背負ったまま受付をしない」などと偉そうに話してきましたが、自分の価値観の押し売りだったかもしれないと反省することもあります。社会生活に支障をきたすことはないので、相手の心象への対応をあたかも常識のように伝えていたからです。



さて、表題の言葉は、相対性理論で有名な物理学者・アインシュタイン博士が残した言葉です。この常識（≒偏見）は生きる時代や場所などによって大きく異なるはずですから、必ずしも絶対的なものではないと言えます。アインシュタイン博士の言う「１８歳」は、日本では高等学校の卒業を区切りにしていると考えると、子どもたちは、今まさに家庭と学校の双方で常識のコレクションを増やしていると言っているのかもしれません。学校では、子どもたちが自分の物差しを基準にして行動をとることが多々ありますから、日々友達とぶつかり合い、磨き合うことの連続です。そして互いに認め合う中で、それぞれが輝くためにはどんなことが大切なのかを学んでいきます。この経験が、時間を経ながら共通の物差しになっていき、常識となって蓄積されていくのだと思います。教室で頑張る子どもたちは、間違いを通して成長をしていきます。それは教科の学習以上に、人間関係形成の礎となるほど大きな意義のあるものだと思います。

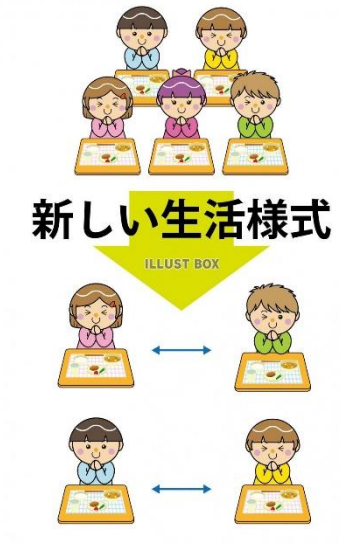
アインシュタイン博士は、次のような言葉も残しています。

“重要なのは、疑問を持ち続けること。知的好奇心は、それ自体に存在意義があるものだ”“失敗したことのない人間は、挑戦したことのない人間である”

「教室は間違うところだ」という言葉を使いますが、まさにその通りです。トライするから失敗もするし、失敗してこそ学ぶこともたくさんあります。進学・進級まであと２か月余り。小学生の今だからできること、努力すれば届くのではないかと思われる目標に向かって挑戦する子どもたちを応援します。

今後の教育活動について

１月７日（金）に、感染急拡大に伴って、滋賀県の感染レベルがレベル２「警戒を強化すべきレベル」に引き上げられました。これに伴い、大津市教育委員会のガイドライン「『新しい生活様式』を踏まえた学校の取組」も「レベル２」に引き上げられました。座席の配置等はレベル１と差はありませんが、教育活動において、より「可能な限り感染症対策を行った上で、リスクの低い活動から徐々に実施することを検討する。」「児童生徒の接触、密集、近距離での活動、向かい合っての発声について、可能なものは避け、一定の距離を保ち、同じ方向を向くようにし、また回数や時間を絞るなど、レベル１以上に慎重に検討する。」とあります。本校はレベル１の際にも、児童の健康安全を最優先にするため、上記の活動については細心の注意を払って参りましたが、今後も慎重に対応をして参ります。



上記ガイドラインに、レベル２においては「教室での学習参観は行わない」とあることから、１月１７日付「学習参観についてお知らせ」でお知らせしたように、誠に残念ですが、来校を伴う参観を取りやめ、Ｚｏｏｍを使った参観に変更させていただきます。ご理解の程、宜しくお願いいたします。また、「こうまのさんぽ」の皆さんによる読み聞かせや３年生の総合的な学習の時間での「真野の名人さん」を招聘した学習等、ゲストティーチャー等の来校を伴う教育活動についても見直して参ります。

鉛筆の持ち方について思うこと

教室を巡回し、子どもたちが学習する様子を見ていて、気になることがあります。その一つは以前に書いた上靴の踵を踏むこと、次に鉛筆の持ち方です、

私の右手中指には、大きな「ペンだこ」があります。指に鉛筆などをギュッと押し付けるからです。筆圧が強いので、シャープペンシルの芯が０．５ｍｍではすぐに折れてしまうので、論文調のものを仕上げる場合には０．９ｍｍ かつ Ｂ以上のシャープペンシルで書くことがよくありました。

私自身、何となくペンの持ち方にはコンプレックスを持っています。力を入れすぎるので、人差し指が反ってしまうのです。いつの頃からか変な癖がついてしまいました。人前で記名する時には、他人の視線が気になって仕方ありません。

自分を棚に上げて、営業や店員の方のペンの持ち方を見てしまいます。正直、「よくそれで書けるなぁ」と思ってしまうことも少なくありません。だからこそ、子どもたちには正しい鉛筆の持ち方を身につけて欲しいと思っています。ペンの持ち方や姿勢が美しいとか、文字がきれいというだけで得をする場面があるかもしれません。無理やり矯正するというより、自分で意識して直せるのは今しかないと思うのです。

随時更新しています！真野小学校Webページをご覧下さい！

学校行事や学習活動の様子を随時紹介しています。是非ご覧下さい。

真野小学校　検索　　ＵＲＬ：http://www.otsu.ed.jp/mano-e/